

PROPOSAL

ボランティア活動における心得 —“かせぎ”と“つとめ”的違いと、 ボランティアの許される関係—

NPO法人新潟水辺の会代表 大熊 孝



Personal Data

1942年台北生まれ、千葉育ち、新潟市在住。東大工学部土木卒、工学博士、新潟大学名誉教授、NPO法人新潟水辺の会代表。専門は河川工学、土木史。自然と人の関係がどうあればいいかを、川を通して研究しており、川の自然環境を守るとともに、治水・利水のあり方を住民の立場を尊重しながら考察している。著書に、「利根川治水の変遷と水害」(東大出版会)、「洪水と治水の河川史」(平凡社)、「川がつくった川・人がつくった川」(ボプラ社)、「技術にも自治がある—治水技術の伝統と近代ー」(農文協)などがある。

「仕事」とボランティア活動の両立問題でした。忙しい「仕事」を毎日やつとこなしているのに、なんで身銭を切つてまでボランティア活動をするのか？ その辺を明確にしないと、なんとなく活動しにくいという雰囲気がありました。

この問題に関しては、7年目の記念シンポジウムで哲学者の内山節氏に記念講演をいただき、ヒントをもらいました。内山氏は、「仕事」には“かせぎ”と“つとめ”的二種類があると言われたのです。“かせぎ”は日々の糧を得る個人の利益のための仕事であり、“つとめ”は人や世の中のためになる仕事です。その様子は、インターネットで「新潟水辺の会」と入力するとホームページにアクセスできますので、そこで

私が所属する「NPO法人新潟水辺の会」は2002年3月に発足しまし

たが、その前身は1987年10月に10人あまりで始めた「新潟の水辺を考える会」です。現在の会員数は約200人で、「記憶にのこる美しい水辺の創造」を目的に、活動してきました。その歴史はすでに四半世紀に達しようとしており、会員の高齢化は否めないので、分裂したり、解散することなく、現在も、川掃除や鮭稚魚放流等を中心として、活発な活動が続けられています。その様子は、インターネットで「新潟水辺の会」と入力するとホームページにアクセスできますので、そこで

ご覧いただければ幸いです。

今回の原稿依頼の趣旨はボランティアの現場から行政や施設に対する要望・提言ということでしたが、まずはボランティアを行う者がどのような想いで活動しているのか、あるいは活動すべきなのか、そこが重要であり、“ボランティア活動の心得”というべきものを確認しておきたいと思います。それが確認できていれば、行政などへの要望も相手の立場を尊重した相互理解のうえで実現できるのではないかと思っています。

まず、「新潟の水辺を考える会」の発足当初に問題となつたことは、我々の

あり、社会的動物である人間はこの“つとめ”で誇りや生きがいという充足感を得るということでした。

資本主義的な市場経済社会になる前は、百姓であれ職人であれ「仕事」をすれば、それがそのまま“かせぎ”であり、“つとめ”になっていました。しかし、市場経済社会の中ではそれが分離して、意識しなければ“かせぎ”だけに陥ってしまうということです。人間が誇りある人生を送るには、“かせぎ”だけでなく、“つとめ”も必要であり、今のような市場経済優先の社会では意識して“つとめ”を行なうことが大切であり、それがボランティア活動の基本であるということでした。この「仕事」の仕分けによって、ボランティア活動なるものが位置付けやすくなつたと思います。

ついで、この“つとめ”における責任問題をどう考えるかです。“かせぎ”では、競争・効率原理が働き、他人を出し抜いて利益を上げることが至上命令となり、「ポカ」が許されません。「ポカ」をすれば、個人として責任を取らなければなりません。しかし、“つとめ”では、確かに集団として責任を持たなければなりませんが、結果として社会に役立つていればいいのであって、ボランティア活動における「ポカ」は、それを補い合えば、互いに寛恕されるべきことであると思います。

さらに、20周年記念シンポジウムでも、内山節氏に「水辺の時間価値」という講演をいただきました。ここで問題となつたのは、「時間」をどのように考えたらいいかということでした。「光陰矢のごとし」で、絶えず自分の前から過ぎ去つて行く時間しかなく、何も記憶に残らないまま人生を朽ち果てていいのか、という問題です。これについて内山氏は、「時間」にも二種類あります。しかし、この二種類についての説明は、内山氏の「時間」にも二種類あります。（あるいは「循環的時間」）に分けられるというのです。明治時代以降、我々の生活は「時計」という客観的時間に合わせ、効率的な成長ばかりに気をとられ、一方向のみの時間の中で過ごしてきました。しかし、本来の人間は、自然の循環の中で生活・生産し、祖先から子孫へ継承しながら、「関係的時間」

も、内山節氏に「水辺の時間価値」という講演をいただきました。ここで問題となつたのは、「時間」をどのように考えたらいいかということでした。「光陰矢のごとし」で、絶えず自分の前から過ぎ去つて行く時間しかなく、何も記憶に残らないまま人生を朽ち果てていいのか、という問題です。これについて内山氏は、「時間」にも二種類あります。しかし、この二種類についての説明は、内山氏の「時間」にも二種類あります。（あるいは「循環的時間」）に分けられるというのです。明治時代以降、我々の生活は「時計」という客観的時間に合わせ、効率的な成長ばかりに気をとられ、一方向のみの時間の中で過ごしてきました。しかし、本来の人間は、

のなかで何世代にもわたる持続性を確保してきたというのです。「時間」にもこの二つがあり、そのことを念頭にボランティア活動すればいいのです。なわれ、世界基準の直線的に流れる時間空港が必要になり、24時間取引が行なわれる、世界基準の直線的に流れる時間空港が必要になります。しかし、“つとめ”的世界では、24時間に身を置く以外にないようになります。しかし、“つとめ”的世界では、地域にあつた関係的時間、自然の生命とともににある循環的時間の中で、「記憶」を刻みながら、子孫への継承をはかることが必要なかもしれません。

ボランティア活動を楽しむ心得として、“かせぎ”と“つとめ”、“直線的時間”と“関係的時間”を意識しながら、地域とかかわり、循環する生命を大切にして、自分自身の記憶にのこる“つとめ”をしていくことが大切なのはないかと考えます。（なお、上記の内山節氏の言説は、大熊の解釈による要約であり、文責は大熊にあります。）

（なお、上記の内山節氏の言説は、大熊の解釈による要約であり、文責は大熊にあります。）